

まえがき

一般的に、ものごとを正しく理解するには、俯瞰的に全体を捉えようとする「鳥の目」と、近距離から深く詳細に見ようとする「虫の目」が必要だと言われます。また、「虫の目」には、視点を変えて複眼的に見るという考え方もあるようです。（さらに最近では、時の流れを捉える「魚の目」などの説も見受けられます。）日本語をはじめとする言語教育プログラムでも、ほとんどの教師は、教師と学習者という近い距離での「虫の目」の視点で、日々の授業活動でどのように学習を進めると効果のかなどを常に詳細に考えているのではないのでしょうか。その一方で、自分が関わる言語教育プログラムを俯瞰的に、すなわち「鳥の目」で社会的に位置づけて、そして同じ「虫の目」でも複眼的に、すなわち異なる立場からはどう見えるかなども考慮しながらプログラムの詳細を見るというのは、きっかけがないと取り組みにくいことかもしれません。しかし、このようなプログラムの捉え方は、PDCA（Plan 計画 ⇒ Do 実施 ⇒ Check 評価 ⇒ Act 改善）サイクルを活用してよりよいプログラムの運営を進めていくうえで不可欠なものです。

そこで、私たち、言語教育プログラム研究会^{*1}では、そのきっかけとなるようなツール「言語教育プログラム可視化テンプレート」を作成しました。本書はそのテンプレートの解説書です。（開発の理由や経緯の詳細は1章をご参照ください。なお、本書の記述は、日本語教育担当者が日本語教育界の現状を踏まえたくて著したのとなっていますが、「言語教育プログラム可視化テンプレート」自体は日本語教育に特化しているわけではありません。さまざまな言語教育プログラムにも適用できるように意識して作成してあります。）

現職者あるいは運営担当者の方は、自分が関わる言語教育プログラムについての理解を深めるために、ぜひ本書をご利用ください。テンプレートのいろいろな質問に答えていくことにより、自分が意識していなかったプログラムの側面や全体像が見えてくるでしょう。あるいは、プログラムの在り様を記述することにより、例えば外部の協定機関関係者などに自分のプログラムがどのようなものであるかを説明することにも活用可能です。また、教職員研修（FD / SD=Faculty Development / Staff Development）などの機会に、可能であれば異なる立場にあるプログラム関係者間でテンプレートを記述してみて、それぞれの捉えるプログラムの現状理解を共有し、認識のずれや関心度の違いなどを確認してみてください。それによって、プログラムを複眼的にも捉えることができるようになり、よりよいプログラムの実現に結びつけるための対話を始められるでしょう。

さらに、日本語教師養成課程でも、『登録日本語教員 実践研修・養成課程コアカリキュラム』^{*2}の「必須の教育内容 37 項目」に含まれる学習項目「〈21〉日本語教育プログラムの理解と実践」のための教材として利用すれば、早い段階から言語教育プログラムを俯瞰的、そして複眼的に捉える能力の育成に役立つはずで

折しも、日本語教育の活動が法制化され、文部科学省による日本語教育機関の認定制度や国

家資格の登録日本語教員制度、実践研修機関・日本語教員養成機関の登録制度などが動き出しました（本書制作時点）。これらの制度が制定された社会的背景を考えると、例えば登録日本語教員資格などのいろいろな制度を活用する際に、一教師であっても、自分が関わる言語教育プログラムを社会的存在として俯瞰的、複眼的に捉える視点がますます重要になってきているのではないのでしょうか。そのために、言語教育プログラム可視化テンプレートの記述を通して、それぞれが関わる言語教育プログラムの在り様への理解を深めていただけることを願っています。本書がよりよい言語教育プログラムの実現に少しでも貢献できれば幸いです。

令和6（2024）年夏

執筆者を代表して 札野 寛子

*1 「言語教育プログラム研究会」ウェブサイト

http://www17408ui.sakura.ne.jp/tatsum/project/Pro_Ken/index.html



*2 「登録日本語教員 実践研修・養成課程コアカリキュラム」（令和6年4月1日 中央教育審議会生涯学習分科会日本語教育部会決定）

https://www.mext.go.jp/content/20240321-ope_dev02-000034812_4.pdf

